

オーストラリアのフェミニズム文学

——八〇年代の収穫

加藤めぐみ

一九八〇年代のオーストラリア文学におけるフェミニズム志向にはめざましいものがあった。けれどもこれは、六〇年代の戦闘的な女性の自立と権利の獲得・拡張を指した運動の延長線にあるものではなく、今まであまり日の目を見なかった女性作家及びその作品の復権、そしてさらに、後に続く現代の女性作家に与えられたチャンスといふべきものであろう。最近の女流作家の作品と同時に、ひと時代もふた時代も前の作品が発表され、アンソロジーに収められ、またそれらに対する批評活動も活発になった。また、移民がもたらしたオーストラリアの新しい時代、すなわち多民族による文化多元主義による新しいフェミニズムも生まれつつある。フェミニズム文学の関係では、一九八三年に *Who is She? Images of*

Women in Australian Fiction 一九八五年に *Gender, Politics and Fiction: Twentieth Century Australian Women's Novels* 一九八七年には *The Babe is Wise: Contemporary Stories by Australian Women* などが続けて出版された。一九八七年から翌年にかけては、アメリカのフェミニスト出版社、パンドラプレス (*Pandora Press*) によって、ローザ・プレイド (*Rosa Praed*)、アーダ・ケンブリッジ (*Ada Cambridge*)、タスマ (*Tasma*) といった今世紀初頭の女性作家の絶版となっていた一群の作品がシリーズとして再出版されている。近年の女性学のブームそのままに、フェミニズムへの傾向が出版にも反映されている。ここでは、一九八八年に出版された二つのアンソロジーを中心に、オーストラリア文

学におけるフェミニズムの特色を考えてみたいと思う。

一 オーストラリア文学とフェミニズム

オーストラリア文学の歴史は、児童文学の領域を除き、男性が優位だった社会そのものを反映していることが一般に知られている。一七八八年に植民が開始されて以来、微弱ながら文芸作品が芽生え、文学が花をつけ始めたが、本国イギリスへの追従をやめて独自の文化を目指す一九世紀後半になって、人々が自国の文学に求めたのはブッシュの奥でたくましく生きる男たちの物語だった。一八八〇年の創刊から長期にわたって文芸の中心であり続けた *Bulletin* には、金鉱掘りや気ままに旅する羊の毛刈り職人、牧童といった粗野でたくましい男性が繰り広げる生存競争、または「メイトシップ」——いわゆる男の友情——を描いた物語が発表された。多くの詩や小説は、男性作家によって書かれ、また内容も男性的視点からの、つまりブッシュでは役に立たない女性にあまり同情的でないものが多かった。当時、数少ない女性作家の一人バーバラ・ベイントン (Barbara Baynton) の短編に出てくるブッシュに生きる女性たちも、作家の冷やかな現実直視の目を通して、救いようのない哀れな犠牲者として描かれている。

また、文学には当時の政治もよく反映されていた。二

〇世紀初頭から掲げられた白豪主義は、原住民であったアボリジナルはもちろん、移民の有色人種をことごとく政治、経済、文化の中心から追いやるうとしたが、これが文学にも色濃く表れている。外国人嫌いは一般的感情であり、有色人種は作家にも、また作品の中にもなかなか現れなかった。ようやく六〇年代になってそれを逆手にとってオーストラリア社会を痛烈に批判したザヴィア・ハーバート (Xavier Herbert) が現れたが、これ以外に見るべき作品はなかったといえる。このような情況で、女性作家も不当な扱いを受けていたのである。

そしてこの不当な扱いは、すぐに正されることはなかった。一九八八年にキャサリン・マーティン (Catherine Martin) の *An Australian Girl* が再出版されたが、その序文の中で、エリザベス・ウェビー (Elizabeth Webby) は、一八九四年に絶版になって以来再版されずにいたこの作品は現在でも十分読むに値するものであり、マーティン自身も多くの研究者によって南オーストラリアの注目すべき作家の一人に上げられているにもかかわらず、その他の作品も図書館でしか読むことができなかったと述べている。

けれども、マイノリティながら、オーストラリアの女性文学者は動き出していた。ブッシュやメイトシップを描いたことにおいて代表格であるヘンリー・ローソン

(Henry Lawson) の母、ルイザ・ローソン (Louisa Lawson) は、息子ほど知名度はなかったにしても、*The Dawn* の編集・発行の中心として活躍した。一八八八年に創刊されたこの雑誌は、一九〇五年の廃刊まで、最初のフェミニスト機関誌として女性を啓蒙し続けた。マイルズ・フランクリン (Miles Franklin) は、現在ではその *My Brilliant Career* (一九〇五) が映画化されたことによって多くの国々で読まれているが、当初からブッシュや都市でのオーストラリア女性の精神的・物理的自立を目指し、実践し、それを著した女流作家の一人だった。オーストラリア作家でノーベル文学賞を受賞しているのは今のところパトリック・ホワイト (Patrick White) だけだが、それ以前にすでにヘンリー・ハンデル・リチャードソン (Henry Handel Richardson) やキャサリン・スザンナ・プリチャード (Katharine Susannah Prichard) といった女性作家がノミネートされている。プリチャードはまたフェミニストとしての活動のほかに、オーストラリア共産党の創立者の一人としても活躍した。このほか国内だけでなく、イギリスやアメリカでも多くのオーストラリア女性作家が知られている。

プリチャードのように、社会主義や共産主義とフェミニズムを結び付け、それをテーマにした女性作家が後に続いた。先のローソンやフランクリン、そしてアーダ・

ケンブリッジ、メアリー・ギルモア (Mary Gilmore)、カイル・テナント (Kylie Tennant) らである。これらの作家は、男性で資本家・大農場主といった白人英国本国出身者が優位である社会において弱者の側に立って、弱者の一員である女性としてのものを見ようとしていた。

二 近年のフェミニズム文学

二つの大戦から繁栄期へと続く一九五〇年代、六〇年代まで、男性・白人優位のオーストラリア社会に変わりはなかった。南オーストラリア州で一八九四年に婦人参政権が認められて以来、確かにオーストラリアは女性の公民権に関しては決して遅れをとる国ではなかったが、社会的に、そして文学の面では顕著な進歩は見られなかった。当時オーストラリアを訪れたイギリス人女性作家ジャン・モリス (Jan Morris) は、当時のオーストラリアは「ひどく自意識過剰で、他国に対して独立心が旺盛かと思えば、いやに迎合しているようにも見え、またその社会も入植当時そのままに、支配者と被支配者、すなわち看守的な英国かぶれの人種偏見に満ちた気取り屋たちと、囚人的な、アイルランド人そのままの反骨精神の持ち主たちに二分されていた」と観察している。ゆえに社会は男性的で、「支配者」側も「被支配者」側も「クリケットやブーズ(酒飲み騒ぎ)、メイトシップという名の

労働者兄弟愛に国をあげて熱中しており、それに熱狂的
愛国心と他人種への偏見、そして俗物根性が加わって
た」のである⁽³⁾。

それでも、ローソン(母)らに始まるオーストラリア
ン・フェミニズムの伝統とアメリカの運動家たちの影響
で、社会におけるフェミニストの活動は広がりつつあ
った。政治に参入していこうとする意識はアメリカの女性
たちほどではなかったが、一九六〇年代から七〇年代に
かけてオーストラリアのフェミニストたちは、急進派、
改革派、社会主義派のいずれかの形をとりながら、社会
正義と平等を目指して運動を展開した⁽⁴⁾。けれどもこれが
文学作品に顕著に表れたとはいえないだろう。エリザベ
ス・ハロワー(Elizabeth Harrower)の *The Watch
Tower* (一九六六)、ジェシカ・アンダーソン(Jessica
Anderson)の *Tiva Lirra by the River* (一九七八)な
ど、社会や家庭における女性の地位と問題を扱った小説
は書かれたが、特筆すべきものは多くなかった。ミリア
ム・ディクソン(Miriam Dixon)が述べているよう
に、イギリスやスウェーデンといった国々では、知的エ
リートである活動家が文学作品にそのフェミニズムを反
映させて運動に貢献しているのだが、オーストラリアで
はその傾向が少なかったと考えられる⁽⁵⁾。それでもフェミ
ニズム運動関係——女性の地位や法律、労働、教育に関

する論文やエッセイは数多く出版されるようになった。
ノーマン・マッケンジー(Norman Mackenzie)の
Woman in Australia (一九六二)、ジュリー・リグ
グ(Julie Rigg)の *In Her Own Right* (一九六九)、ディ
クソンの *The Real Matilda* (一九七六)などが次々と発
表された。またそれらを集める雑誌も多く現れた。け
れどもフェミニストたちの声が文学に大きく反映される
までには時間が必要だった。

ようやく七〇年代になって、昔の女性作家による文学
作品の見直しが始まった。プリチャード、ネティ・パー
マー(Nettie Palmer)、フランクリン、テナントとい
った先駆者たちの再評価がなされた。そしてやっと七〇年
代から八〇年代にかけて、女性作家が自分自身の声で語
る作品が増え始めたのである。「(オーストラリア女性
は)その単調な人生を、男が語る物語を聞くことだけで
送っていた。自分自身の物語は漠然としており、男の物
語が、物語の絶対の形成(mode)だった⁽⁶⁾」。しかしこ
で女性の語りのモードが認められるようになったのであ
る。

三 一九八〇年代へ

パンドラプレスのオーストラリア女性作家シリーズの
編集もおこなったデイル・スペンダー(Dale Spender)

が編集した *The Penguin Australian Women's Writing* (Victoria: Penguin Books Australia, 1988) は、入植時代から現代に至るまでのオーストラリアの女性たちの声を集めたアンソロジーである。女囚であったマーガレット・キャッチポール (Margaret Catchpole, 1762-1819) から、ジャーメイン・グリヤ (Germaine Greer, 1939) まで、計三六人の女性たち (作家という職業でない者もいるので) の短編、エッセイ、長編の抜粋などが収められている。論文や記事もあるので純粋な文学アンソロジーとは呼べないかもしれない。

特に、初期の女性たちのものは手紙か日記であり、公開を目的として書かれたものばかりではないので、厳密には「作品」とは呼べないかも知れない。女囚も入植者の妻たちも、当時字が書ける者は手紙をよく書いた。手紙だけが本国とそこに住む家族と自分を結ぶ絆だったからである。故郷のニュースを問い、またこちらの生活の様子を知らせる手紙が唯一の情報源であり、生きがいともなった。しかしその手紙も当時の状況を考えると、現在の手紙のもつ意味とは異なってくる。船という輸送手段、またオーストラリアでの未発達な交通で、通信を頻繁に交換することは殆ど不可能であった。スペンダーがいうように、返事をなけば期待しないで書く手紙が自然にモノローグ調になっていったのは当然であろう。身

の上話、告白、そして周囲の状況を報告する手紙や日記は、当時の女性を最もありのままに伝える文学になったのである。

上記の初期入植者や児童文学者、推理小説家、その他特に女性の視点を強調していない者を除いて、このアンソロジーに収められた女性作家は皆フェミニストである。キャサリン・ヘレン・スペンス (Catherine Helen Spence) から、*The Female Funnuch* のジャーメイン・グリヤまで、それぞれの時代の主なフェミニスト作家が並んでいる。社会・共産主義とフェミニズムを結び付けた活動家、フェミニストとしての立場のジャーナリスト、急進派フェミニストなど、さまざまな形のフェミニズムの作品が一堂に収められている。「女性」という大枠の中で、それぞれが語る権利をあたえられているのである。このアンソロジーにはフェイス・バンドラー (Faith Bandler) やネネ・ゲアー (Nene Gare) のようにアボリジナルの問題を扱う作家も含まれているが、作者自身はアングロ・ケルティックであることがほとんど前提となっている。オーストラリアの女性史を眺めると、確かに初期からイギリスやアイルランド、スコットランドからきた者が殆どだった。キャス・ウォーカー (Kath Walker) のような英語で書くアボリジナル作家・詩人が出てくるまでには一五〇年も待たなければならなかつ

た。けれどもアボリジナルだけに限らず、現在の文壇で活躍しているアングロ・ケルティックでない作家からは、ギリシャ人のアンティゴネ・ケファラ (Antigone Kefala) しか収録されていない。作家をすべて収録できるわけではないものの、このアンソロジーの印象は「白人社会の女性たち」のものであることに留意しなくてはならない。

一方、まったくアングロ・ケルティック系を排した女性作家のアンソロジーが同年出版されている。スネジヤ・グニューウ (Sneja Gunew) とヤン・マヒディン (Jan Mahyddin) 編の *Beyond the Echo: Multicultural Women's Writing* (St. Lucia: University of Queensland Press, 1988) である。副題通り、「女性であること」そして多元文化主義であることを前面に打ち出したこのアンソロジーは、四八人の様々な文化を背景にした作家の散文と詩を収録している。移民してきたり、あるいは両親が移民で自身はオーストラリアで生まれたこの作家たちの母国は、ヨーロッパ (ドイツ、イタリア、ポーランド、ギリシャなど)、ロシア (ラトヴィアなど)、アジア (シンガポール、中国、インドネシア、マレーシア) と多岐にわたる。両親のそれぞれの出生国、自身の生まれた国、その後移民してきたオーストラリアと、数カ国の言語・

文化の影響を受けている作家も少なくない。アボリジナル作家も一人収録されている。

女性であるゆえに社会で味わう理不尽、それに加えて移民の国オーストラリアでの移民間の不公平が、このアンソロジーの作品の主要テーマである。オーストラリアはイギリスやアメリカに翻弄されながら自国のアイデンティティーを探し続けていた。そこで中心となった概念は今まで述べてきたように男性社会、白人社会であり、またアングロ・ケルティック社会であった。前書きにあるように、このアンソロジーでは、現代オーストラリア社会で日の当たらぬ (invisible) まま、語る機会を与えられなかった英語を母国語としない女性たちに「他人の声のエコーでなくそれを越えて」自分の言葉で語らせている⁽⁸⁾。アンティゴネ・ケファラやローザ・キャピエロ (Rosa Cappelletto) のように、すでに地位を確立している作家・詩人もいるが、無名の、もしくは作家ではない人のももの同時に収められている。殆どの作品は英語で書かれているが、母国語とその英語訳がついているものもある。

内容については、やはりアングロ・ケルティックが優先されているオーストラリア社会への批判が多い。イネズ・バラネイ (Inez Baranay) の短編 "You Don't Whinge" には、オーストラリアがいかに移民にとって

素晴らしい国か声高に語られる一方で、「英語圏」の生活とのギャップから生じる解決できない違和感、疎外感に悩む移民の生活が描かれている。唯一のアボリジナル作家であるルビー・ラングフォード (Ruby Langford) は、「ブンジュルング族」のアボリジナルというだけで通ったはずの主人公が、どのように西欧式の名前をつけられ、またそれが数度の結婚によって（女性であるために）くるとかかわらなければならなかったか、短編“*My Names*”で淡々と語っている。

これらの作家は、アメリカで『カラー・パープル』のアリス・ウォーカー (Alice Walker) がそうであったように、人種と性によって何かしらの不当な扱いを感じている。しかし、ウォーカーらが示したような告発、抵抗、目指すべき方向への改善運動を明確にしているわけではない。言葉の問題にしても母国語の作品の扱いが今ひとつあいまいで、オーストラリアを多元言語の国にするという希望の実践か、それとも単に英語で書かない作家のための特別な計らいなのかよくわからない。また、本場の多元文化主義というのは汎文化主義 (omni-culturalism) のことであって、アングロ・ケルティック系も含むべきだったという批評もある⁽⁹⁾。このアンソロジーは、確かに現在の文化的に複雑なオーストラリアで主流になれない移民・女性作家を紹介することにおいて、

多元文化フェミニズムの一環として成功している。これをエスニック・フェミニズムと呼ぶとすれば、これはあくまでアングロ・ケルティック系と一線を画すのだろうか。その将来の展望についてはまだはっきりしていないようである。

四 一九九〇年代へ

一九八〇年代も終わりになって、上記のようなアンソロジーが前後して出版されたということは、この時代のオーストラリアン・フェミニズム文学のひとつの象徴のように考えられると思う。それぞれが、今までの文学における女性作家の活躍の再認識と再評価、そしてすでに始まっている新しい時代の多民族社会の中で見直されなければならぬフェミニズムを示しているのである。これらがこれから先に、どのような接点で結びつき（あるいは独立したまま）発展していくのか、そして文学作品にどのように表されていくのだろうか。ここでは述べることができなかったが、ドロシー・ヒュエット (Dorothy Hewett) のように劇作でも女性の進出は目覚ましい。そして今後もすべての分野においてますます多くの女性作家の活躍が容易に予想できよう。このような女性作家の進出は、文学のフェミニズムとしての大きな枠のなかで一つの方向性をもつだろうか、それともフェミニズム

の枠を越えて、オーストラリア独自の多元文化そのままに様々な方向に進んでいくのだろうか。

日本でもフェミニストの視点からの社会批評が盛んであり、文学でもひとつのジャンルとして多くの作品が書かれている。同じフェミニズム文学でも、移民の国である現在のオーストラリアとまだ殆ど単一民族である日本を並べて比べることはむずかしい。確かに日本では日本語で書かなければ文学作品として読まれない。けれども英語圏のオーストラリアに変化が起きているように、日増しに海外との接触が密になり移民は多くないにしても在日外国人の数が増大している今、いつまでも日本のフェミニズム、日本語で書かれた文学、と限定することはできなくなるだろう。オーストラリア社会は、かつての男性優位社会から劇的な変化を遂げており、多元文化にアジアも含めて予測できない広がりを見せている。先のエスニック・フェミニズムもアメリカのフェミニズムと共にいずれ日本に影響を与えることになるだろう。変化しつつあるオーストラリアン・フェミニズムの文学に様々な可能性を見いだすことは、日本のフェミニズムと文学における将来性を問う上でも恰好の研究対象になるものと考えられる。

(かとう・めぐみ／経営学部非常勤講師)

注

- (1) *Bush Studies*, 1902.
- (2) Introduction to *An Australian Girl*, New York: Pandora Press, 1988.
- (3) "Australian Distractions," the excerpt from Jan Morris, *Pleasures of a Tangled Life, All Asia Review of Books*, Vol. 1, No. 5, Oct. 1989.
- (4) Miriam Dixson, *The Real Matilda*, Victoria: Penguin Books Australia, 1976, revised edition, 1983, ch. 7, p. 243.
- (5) 同上' p. 262.
- (6) *The Penguin New Literary History of Australia*, ed. L. Hergenham, 1988, p. 518; P. White, *A Fringe of Leaves* の引用による。
- (7) Introduction to *The Penguin Australian Women's Writing*, p. xv.
- (8) Introduction to *Beyond the Echo*, p. xx.
- (9) Serge Liberman, "The Hazards of 'Multicultural Writing,'" *Australian Book Review*, Nov. 1988, p. 23.